

日本の演奏会プログラムより見た西洋声楽受容の一考察

A study of the Introduction of Western Vocal Music into Japan
Surveying the Programs during the Meiji Period

直江学美
Manami Naoe

〈要旨〉

明治44年に来日したイタリア人声楽家アドルフォ・サルコリ（1867-1936）が日本の西洋声楽受容に与えた影響を、当時の演奏会プログラムを調査し、考察する。

唯一の官立音楽機関である音楽取調掛は「学校唱歌ニ用フベキ音楽取調ノ事業」を行うために設置された。そのため、明治期の「歌」は芸術としてより唱歌教育に必要な実技としての意味合いが強い。また、東京音楽学校に声楽部が設置されてから声楽を担当した外国人はいずれもドイツ出身であった。

本研究では、特に明治から大正にかけての日本での演奏会プログラムを調査し、ドイツが主流であった日本声楽界に、突然来日し、永住したイタリア人声楽家、アドルフォ・サルコリが日本の声楽界に与えた影響を明らかにしたい。またこれは、ともすれば忘れられがちな「民間」の状況を把握し、西洋音楽受容史を見直そうとする試みの一端である。

〈キーワード〉

西洋音楽受容, 声楽, イタリア

1 はじめに

明治44年、演奏旅行先であった上海で勃発した辛亥革命を避け偶然に日本に立ち寄ったイタリア人テノール歌手、アドルフォ・サルコリ（Adolfo Sarcoli 1867?-1936）は、その後日本に留まり、多くの弟子を育てることとなった。サルコリの活動の場は、もっぱら四谷仲町にあった自宅であり、官立の学校や、公の場所ではなかった。しかし、弟子には、三浦環、関屋敏子、原信子、ベルトラメリ能子、喜波貞子、奥田良三、田谷力三などが居並ぶ。三浦環は言うまでもなく、関屋、原もスカラ座に在籍して活躍し、喜波もウィーン国立歌劇場をはじめとした欧州各国の劇場で演奏して好評を博しているなど後の日本の音楽界を代表する人物である。

現在、サルコリの存在はほとんど忘れられており、日本の音楽の歴史にもその名前は見当たらない。一方、目賀田種太郎や伊沢修二、山田耕筰といった官立機関に所属した人物の記述、そして活動は『山田耕筰全集』『東京芸術大学百年史』をはじめ、多岐に渡って残っており、多くの研究がなされている。つまり官立機関は公文書をはじめ、あらゆる文献に残り、正当に評価されることの可能性が大きい。民間にいた人物の正当な評価がなされるのは難しいと

考える。そのために、多くの優秀な弟子を育てながらも、その人物像は現在、ほとんど残っていないのであろう。浅草オペラを築き上げた伊庭孝（1887年-1937年）も、サルコリに対して「多くの優れた聲楽家を門下からだしたといふ事は、サルコリ氏の生涯で一番大きな仕事だった」（伊庭孝 1936: 52）と言葉を残している。しかし、これら、当時多くみられたサルコリの人物像、活動の様子、またサルコリに対する音楽関係者や庶民の反応は後生には残りにくい。しかしながら、後に日本の音楽界を牽引していった弟子たち、そしてサルコリの元に集った人物の面々を考えると、日本の音楽受容史を研究する上で、サルコリの活動内容を知ること、そして当時の人々の素直な言葉を再調査することが欠かせない。

また、現在サルコリの存在がほとんど忘れられているということは、「民間」の状況を把握することがいかに遅れているかの現れであり、日本における西洋音楽受容研究にいかに歪みをもたらしているかということの現れに他ならない。そのためにも、当時のサルコリに関する記述を調査し、再度その活動や人物像を明らかにし、日本の西洋音楽受容の過程を検討しなおすことが必要である。

公の文章にその存在が残っていないサルコリにとって、当時の新聞記事は貴重な資料である。本稿では、サルコリ

の活動を調査する第一段階として、当時の日本の新聞記事を中心に検証し、サルコリが当時、どのような存在だったかを明らかにしたい。

2 新聞記事一覧

日付 主題	新聞名 副題
明治45年6月16日 声楽家サルコリー氏去らん	東京日日新聞
昭和2年10月6日 …老樂人の喜び…	東京日日新聞 秘藏の弟子は世界の舞台へ 本場にその名を誇る貞子さん
昭和5年11月18日 棒名丸のお土産話 サルコリー先生の氣焰	上海毎日新聞 三浦環も関屋敏子もこの私が 先生です
昭和5年12月2日 関屋敏子嬢の獨唱會	報知新聞
昭和11年3月12日 臨終迫るサルコリー翁	時事新報 死の床に最後の發聲 面を背 けた歌姫たち
昭和11年3月12日 病篤き恩師を圍み 歌姫たちの歎き	報知新聞 サルコリー氏をめぐる 美し き師弟愛
昭和11年3月13日 サルコリー翁	時事新報 我が樂壇の恩人
昭和11年3月13日 サルコリー翁	國民新聞
昭和11年3月13日 サルコリー翁	都新聞
昭和11年3月13日 サルコリー翁	東京日日新聞 我聲樂界の父
昭和11年3月13日 サルコリー翁	讀賣新聞 臨終の顔に涙の聖水・・・ ソプラノのすゝり泣き あま たの愛弟子たちに圍まれて 長島嬢は哀しみの卒倒
昭和11年3月13日 財産を日本娘に	東京朝日新聞 微笑んで逝く 歌の父サルコリー翁
昭和11年3月14日 我聲樂の父サ翁遂に逝く	時事寫眞速報
昭和11年3月15日 哀調讀美歌の合唱	讀賣新聞 サルコリー翁の葬儀
昭和11年3月16日 サルコリー翁の死	東京朝日新聞 日本音樂の父
昭和11年3月29日 愛弟子への形見に横槍	讀賣新聞 遺産をめぐつて暗争 イタリ ー領事『遺言無効』を主張して 小さき胸に歎く徳子嬢
昭和11年5月2日	時事寫眞新報

涙のアヴェ・マリア	
-----------	--

昭和11年9月5日 けふ初の舞臺に	城南時事 恩師の“知識”も“遺産”も譲ら れた 話題の愛弟子は唄ふ
昭和11年12月4日 法廷に“日伊紛争”	東京日日新聞 サルコリー翁の葬儀遺産を繞り 折も折、心なき訴訟 地下に苦き想ひの 樂壇の父
昭和12年3月12日 樂聖瞑せず	報知新聞 けふ一周忌を迎へて 遺産争ひは續く たゞ黙禱する愛弟子
昭和12年? 友邦の情はサ翁の遺産へも	? 係争は近く解ける

2-1 死亡関連記事

平成21年8月までに検索できたのは「新聞記事一覧」の通りである。特に、サルコリ死去に関しての記事が多いが、それ以外に関しては、調査範囲が広範なため、まだ調査途中である。

死亡記事を見ると、サルコリの敬称が「翁」となっている。これにより、当時、サルコリが敬意を持って、日本に受け入れられていたことが分かる。死亡記事は、讀賣新聞、東京毎日新聞、東京日日新聞、時事新報、都新聞、国民新聞にみられ、また、時事新報、報知新聞には、死亡直前にサルコリの危篤の記事、讀賣新聞、東京日日新聞は葬儀の記事までも掲載され、多くの関心を集めていた事が分かる。

2-2 サルコリと弟子達

「四谷仲町のさゝやかな住ひに靜かに余生を送る老樂人アドルフオ・サルコリー氏こそわがオペラ界の恩人である、日本に來たのは明治四十四年、わが國に初めてオペラを紹介するとともに、かれの手で世界の晴れの舞台に名だたるシンガーを次々と送ったのである吾等のテナー藤原義江氏も、田谷力三、原信子の諸氏も少しの間ながらその教えを受けたが、月謝もとらずにしこんだ最初の秘藏弟子は歐米にその名高き三浦環さん [...] 今から十年ほど前髪をおさげにあどけない姿してその門をくゞつたのは喜波貞子さん、かの女は今や本場のヨーロッパの一流のコロリトラ・ソプラノの歌手として人氣の渦にとりまかれてゐる [...] 三番目の愛弟子は関屋敏子さんである敏子さんは來月六日横濱出帆の諏訪丸であこがれの國イタリアに音樂修行に旅立つことになった、第三の世界的歌手を待つ氏の喜びはどんなであらう」(「…老樂人の喜び…」『東京日日新聞』1927)

「本社主催伊豆地方震災義捐関屋敏子嬢獨唱會は一日午

後六時から本社講堂に開かれた、満員の聴衆中には徳富蘇峰翁の一家族や關屋嬢の舊師ザルコリー氏等の姿も見え」

(「關屋敏子嬢の獨唱會」『報知新聞』1930)

「廿年來東京音樂學校の聲樂教授を務め日本に於ける聲樂の開発者とまで言はれるアサルコリー氏は久しぶりに故國イタリーを訪ひ一年間滞在して更に東京に歸るのであるが、あまり流暢ではないが日本語で廿年も東京にあるので日本の方が故郷のようです。あと三年間を教鞭をとるつもりです世界的なアルトの歌ひ手となつたタマキ・ミウラや近頃ではドシコ・セキヤはこの私が先生です、其の外日本での歌ひ手は殆ど私の教へた生徒ばかりです、タマキ・ミウラはいまイタリーのミラノに居ます、こんど會ひました、私はテ・ール(ママ)の歌ひ手です」(「棒名丸のお土産話サルコリー先生の氣焰」『上海毎日新聞』1930)

死亡関連記事以外では、サルコリと弟子達に関するものが多い。世に知られた、三浦環、関屋敏子の「先生」としての記事、また弟子がそれぞれ外国で活躍する様子が書かれている。特に、「関屋敏子独唱会」と題された記事でも、サルコリが中心に座る客席の写真が使われており⁽¹⁾、本文の中でもサルコリに言及がされている。サルコリ存命中、日本の新聞におけるサルコリに関する記述の多くは、三浦環、関屋敏子、喜波貞子の師としての記事であり、サルコリの存在は「テノール歌手」としてより「声楽教師」として知られていたものであった。

2-3 新聞記事に見られる言説

新聞記事に見られるサルコリの言説を年代順に辿ると以下ようになる。

「声楽家」(『東京日日新聞』1912)

「オペラ界の恩人」(『東京日日新聞』1927)

「日本における声楽の開発者」(『上海毎日新聞』1930)

「教師」(『讀賣新聞』1930)

「我が楽壇の恩人」(『時事新報』1936)

「我が声楽界の恩人」(『国民新聞』1936)

「声楽界の恩人」(『都新聞』1936)

「我声楽界の父」(『東京日日新聞』1936)

「わが楽壇最大の恩人」(『讀賣新聞』1936)

「わが楽壇の“歌の父”」(『東京朝日新聞』1936)

「我楽壇の恩人」(『報知新聞』1936)

「孤独の翁」(『讀賣新聞』1936)

「我声楽の父」(『時事写真速報』1936)

「楽壇の父」(『東京日日新聞』1936)

「イタリーの音楽を日本に紹介した楽壇の恩人」(『城南時事』1936)

来日当初「声楽家」とされたサルコリは、晩年になるに従って「恩人」「楽壇の父」「歌の父」「楽聖」と敬意を持って紹介されるようになる。特に、「声楽の開発者」や「イタリーの音楽を日本に紹介した楽壇の恩人」という言葉からは、サルコリが日本の音楽界に、新しい一石を投じた存在と認められていたことがうかがえる。また、「父」という言葉からは、サルコリが日本の西洋音楽の「生みの親」として認識されていたのであろう。讀賣新聞に至っては「わが楽壇最大の恩人」と最上級の敬意を払っている。それらは、音楽専門誌ではなく、一般の新聞紙面に掲載されているということから、サルコリの存在は音楽界に留まらず、一般人にも知られていたことが明らかである。

3 結び

本稿では、サルコリに関する資料の中でも、特に日本の新聞記事にしばり、西洋音楽受容期におけるサルコリの影響を考察した。現在、音楽界にもその名前がほとんど残っていないサルコリであるが、当時の死亡記事などから、一般にも知られた存在、もしくは一般にも影響のあった人物であったことが分かった。また、その言説から、日本の音楽界に、新しい一石を投じた存在と認められており、日本における西洋音楽の「生みの親」として認識されていたようである。「わが楽壇最大の恩人」(『讀賣新聞』1936年)とまで言われたサルコリに対する賛辞が、後世、音楽界にさえ残らなかったのはなぜだろうか。サルコリは公の場所を好まず、もっぱら自宅という「民間」を活動の拠点としていたことが理由と思わざるを得ない。

本稿では、当時の新聞記事より、人々のサルコリに対する素直な想いを再調査した。現在、それらがすっかり消えてしまっているということは、日本における西洋音楽受容史にいかにか歪みをもたらしているかということの現れに他ならず、当時の人々に、音楽界の「父」とされ広く知れ渡っていたアドルフォ・サルコリの、その生涯と活動の調査をさらに続ける事が必要であろう。

注

(1)



写真前列，向かって右から3人目の白髪男性がサルコリー氏。その左隣は，弟子の丸山徳子氏。円形の写真は関屋敏子氏。（『報知新聞』1930年 「関屋敏子嬢の獨唱會」。12月2日付。）

【言及文献】

伊庭孝 1936 「サルコリー氏の功績に就いて」。『音楽世界』（音楽世界社），第8巻4号，51-55頁。
『東京日日新聞』1912 「声楽家サルコリー氏去らん」。6月16日付。
『東京日日新聞』1927 「…老楽人の喜び…」。10月6日付。
『上海毎日新聞』1930 「棒名丸のお土産話 サルコリー先生の気炎」。11月18日付。
『報知新聞』1930 「関屋敏子嬢の獨唱會」。12月2日付。
『時事新報』1936 「臨終迫るサルコリー翁」。3月12日付。
『報知新聞』1936 「病篤き恩師を囲み 歌姫たちの歎き」。3月12日付。

『時事新報』1936 「サルコリー翁」。3月13日付。
『国民新聞』1936 「サルコリー翁」。3月13日付。
『都新聞』1936 「サルコリー翁」。3月13日付。
『東京日日新聞』1936 「サルコリー翁」。3月13日付。
『読売新聞』1936 「サルコリー翁」。3月13日付。
『東京朝日新聞』1936 「財産を日本娘に」。3月13日付。
『時事写真速報』1936 「我声楽の父サ翁遂に逝く」。3月14日付。
『読売新聞』1936 「哀調讃美歌の合唱」。3月15日付。
『東京朝日新聞』1936 「サルコリー翁の死」。3月16日付。
『読売新聞』1936 「愛弟子への形見に横槍」。3月29日付。
『時事写真新報』1936 「涙のアヴェ・マリア」。5月2日付。
『城南時事』1936 「けふ初の舞台に」。9月5日付。
『東京日日新聞』1936 「法廷に“日伊紛争”」。12月4日付。
『報知新聞』1937 「楽聖瞑せず」。3月12日付。
『?』1937? 「友邦の情はサ翁の遺産へも」。日付不明。